

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
 大学院生研究
 2004 年度研究成果報告書

| | | | |
|---------|--|---------|------------------------------------|
| 研究科名 | 立教大学大学院 文学研究科 英米文学専攻 | | |
| 指導教員 | 所属・職名 | 氏名 | |
| | 文学研究科英米文学専攻 教授 | 新妻 昭彦 印 | |
| 自然・人文の別 | 自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 | 個人・共同の別 | <input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名 |
| 研究課題 | Modernism と Englishness: Virginia Woolf の大戦前の文学活動をめぐって | | |
| 研究代表者 | 在籍研究科・専攻・学年 | 氏名 | |
| | 文学研究科英米文学専攻 博士後期課程 5 年 | 福島 麻子 印 | |
| 研究組織 | 在籍研究科・専攻・学年 | 氏名 | |
| | | | |
| 研究期間 | 2004 年度 | | |
| 研究経費 | 200 千円 | | |

研究の概要 (200~300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

1915 年に出版された *The Voyage Out* は、Virginia Woolf のモダニズム小説家としての出発点として位置付けられる。これまでこのテキストは、モダニズムという言葉とは縁遠い存在として、研究対象となる機会が少なかったが、実は Woolf のモダニズム作家としての船出、モダニズム作家へと脱皮する過程を描いた有望な作品として評価されるべきテキストである。そこで今回、私の研究では、Woolf の第一作であるこのテキストに潜むモダニズム的な性質を、ヴィクトリア朝から次世代へと向かう英国の社会的コンテクストを考慮に入れて論じ、テキストに描かれた英国からの船出という主題の真相に迫る。今年度の研究は今後、大戦、文明の行き詰まりという危機にさらされた 30 年代に Woolf が思い悩む英国のヴィジョン、Englishness を考察する上で、有効なものとなる。

キーワード (研究内容をよく表しているものを 3 項目以内で記入。)

[Virginia Woolf] [Modernism] [英国]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

1915 年に出版された *The Voyage Out*(1915)は Virginia Woolf の小説家としての出発点として位置付けられる。このテキストはこれまで、モダニズムという言葉とは縁遠い存在として看過されてきたが、Woolf の作家としての船出、モダニズム作家へと成長する過程を描いた有望な作品として評価されるべきテキストである。そこで、Woolf の第一作 *The Voyage Out* の主題を Woolf 自身のモダニズム作家としての出発と共に考察し、このテキストに潜むモダニズム的な性格を明確にし、その意義を主張することを研究課題とした。また、ブリテン島からの船出をめぐる一節に見られる「病」という表現から、英国人らしさ(Englishness)を考察する手がかりを見出そうと努めた。

まず、*The Voyage Out* 以降の Woolf のキャリアから、このテキストの位置を定義する必要があった。モダニズム小説としての評価が定着している *Mrs. Dalloway*、*To the Lighthouse*、*The Waves* と比較すると、*The Voyage Out* の形式は、様々な事件が重なり、結末へと一直線に突き進むという伝統的な技法であり、Woolf が糾弾したエドワード朝作家風の形式に他ならない。これは単に Woolf の力量不足によるものと考えられ、Woolf は *The Voyage Out* を執筆する段階では、モダンへの探求という主題を、独自に開拓したモダニズムの小説技法で表現するまでには至らなかったと評価されてきた。しかし、このテキストは、モダニストとしての Woolf の船出を反映し、モダニズムへの関心が確かに現れているのである。

モダニストとしての船出は、*The Voyage Out* の乗客を乗せた船、Euphrosyne が英国を離れるという設定とも深く結びついている。テキストに描かれている 1900 年代後半の英国からの船出は、ちょうどヴィクトリア朝から次世代への船出を物語ることになるからである。ここで注目すべき点は、Woolf がテキストに描いた英国は病んでいるという、奇妙な現象である。英国の「病」については *The Voyage Out* の前身にあたる *Melymbrosia* というテキストが明らかにしている。このテキストの語り手は、「病」という比喩を用いて英国の問題点を見抜いており、これは 1900 年代後半の英国の問題意識、更に英国人らしさを評価する上で、重要な鍵となる。

Melymbrosia に描きこまれた「病」とは、英国人が自国の文明に不満を抱かざるを得ない事態を指す。機械化による完全な生活が用意されている一方で、英国人は孤立状態に陥り、無感情になっている(*Melymbrosia*, 108)。英国は産業の発達を遂げ、豊かな生活が実現すると同時に、国民の孤立、欲求不満という「病」を患っているのである。ところが「病」はこれだけではない。船が出港し、ブリテン島が次第に小さくなるのを眺める英国人たちを描く場面にも見られる。大英帝国の威力を誇りにする英国人は、英国を一つの島として外部の視点から観察すると、単なる小さな島国にすぎないことを思い知らされる。この場面で注目すべき点は、船がブリテン島から遠ざかり、次第に英国の喧騒も聞こえなくなり、祖国が見えなくなる様子を 'shrank'(*The Voyage Out*, 25-6)という単語で表現し、この現象は様々な国土でも起こりうる、と語り手が説明付けている点である。ここでの「病」については二通りの解釈が可能である。'a very small island'(25)を離れた英国人たちの立場から解釈すると、海上に存在しているという奇妙な感覚から発生するアイデンティティの浮遊感を「病」と診ることが出来る。また、*Melymbrosia* で説明された「病」の定義を参照すると、萎縮する英国本土が病に冒されていると解釈することが可能となり、病んだ英国からの船出というタイトルの意義は深まる。英国からの船出を迎えた乗客の心理をめぐる、*Melymbrosia* では 'a strange exhilaration'(24)という言葉で表現し、*The Voyage Out* では同様の言葉で、船出によって乗客が得るものは 'free'な感覚であることを殊更に強調しているのは興味深い。

ここで、船出が象徴するものは、病んだ英国からの精神的解放と定義することが可能となり、さらには Woolf 自身のコンテクストを反映させて解釈すると、伝統的な小説技法による束縛からの解放、そして新たな文体を追及する文学活動の原点が見えてくるのである。

英国からの船出というタイトルが暗示するヴィクトリア朝からの脱出という主題は、Woolf のテキストには具体的にどのように描かれているか考察するには、三つの場面が有効であった。まず、英国からの船出を果たした船をめぐるエピソードである。テキストはこの船を、文学者が健全な創作活動をする文学的空間として描き、流行に疎く、世間離れした生活をギリシャ文学者、哲学書愛好者が文学的感性を研ぎ澄ませるのに必要な空間として尊重している。この見解は、後の Woolf の有名なエッセイ、*A Room of One's Own* にて、鍵のかかる部屋を芸術的創造のために必要な空間とする見解へと接続すると考えられる。

研究成果の概要 つづき

こうして創造された船という特殊な空間で、ヒロインの Rachel は Mrs.Dalloway (後の小説 *Mrs Dalloway* の主人公) に説き伏せられるというプロットから逃れる。Jane Austen を愛する Mrs.Dalloway の女性観について、批評家 Christine Frola は興味深いことを指摘している(‘Out of the Chrysalis: Female Initiation and Female Authority in Virginia Woolf’s *The Voyage Out*’ in *Virginia Woolf*. New Jersey: Prentice-Hall, 1993.)。Frola は、Austen の小説は女性文学のプロットを象徴するものとして解釈し、Rachel が Mrs.Dalloway から手渡された *Persuasion* を読む場面を Woolf がテキストに描き込まなかったのは、Rachel が Mrs.Dalloway のヴィクトリア朝的女性観を受け入れなかったからだとして理由付けている。これは Woolf 自身が、「家庭の天使」という筋を着実に築き上げる女性文学の伝統的プロットに説得されることを拒んだ証であり、‘the ambitions of Woolf’s voyage out’(Froula 147-8)を実現させようとする試みの一部としての解釈が可能となる。

文学的空間を象徴する船に乗り、病んだ英国から離れ、続いて Woolf が取り組む課題は、手法の探求であった。1919年の‘Modern fiction’において物質主義者を否定し、自分は精神主義者であると言明したことは周知のとおりである。ところが、このエッセイが発表されるよりも以前に、精神主義者と物質主義者という言い方はしていないものの、Woolf は両者の考え方の相違を *The Voyage Out* に反映させている。保守党の帝国主義者である国会議員、Richard Dalloway の政治活動を Rachel が批判する場面では、Leeds の郊外に住む‘the mind of widow’にこそ真実を主張する Rachel と、国民の個人の精神を忘れ、日常の責務に明け暮れる Richard との対比から、精神主義者と物質主義者という対立関係が現れてくるのである。これは 1924年に発表された Woolf のエッセイ‘Mr. Bennett and Mrs. Brown’の主題へとつながり、Rachel が英国国民の心理を例えるために引き合いに出した‘widow’は、エッセイに登場する車中の Mrs.Brown の原型であったことが判明する。このエッセイは、Woolf が登場人物の性格描写を論考するもので、Mrs.Brown の内面世界に真実があることを力説し、モダニストとしての Woolf の主張を定着させたものとして有名なものであることは言うまでもない。なお、二人の登場人物の会話には、Woolf が数々の作品の主題とする‘the attempt at communication’への関心が表れていることも指摘しておきたい。

Woolf は手法を凝らし、すべての作品に英国の病を描いていると言っても過言ではない。英国の病をテキストに描く試みは、T.S.Eliot が病的なロンドンを悲観的に描いたように、西洋文明の荒廃を嘆くモダニズム作家たちが取り組んだ課題であった。Woolf もそうした文学活動に取り組んだ一人として挙げられる。Woolf はテキストが生産された時期の社会問題を英国の病として作品に書き写し、その表現方法が作品ごとに発展してきたのだから、その変化を遂げる過程こそ、モダニズム作家としての Woolf の功績を物語るのである。ここで主張すべき点は、Woolf のキャリアを評価する際には、英国の病を見抜く Woolf の洞察力を再考するだけでなく、こうした力が *Melymbrosia* ですでに現れているという事実を見過ごしてはいけない、モダニズム作家としての Woolf の素質は、デビュー作を創作した段階から評価されるべきであるということだ。

The Voyage Out を読んだ Lytton Strachey は‘it’s very, very unvictorian!’ (*Letters*, 56) と Woolf に書き送った。この賛辞が表しているように、Woolf はヴィクトリア朝からの脱出という船出を、無事に果たすことができたのである。ところが *The Waves* 以降の Woolf のスタイルは、*The Years* では伝統的手法を採用する。1932年12月の日記に見られる‘there’s a good deal of gold--more than I’d thought--in externality.’という一節が証明するように、30年代後半から、Woolf の関心は内的世界から外的世界へと向けられた。こうした Woolf の功績はどのように評価されるべきか。モダニストとしての船出は、遺作 *Between the Acts* でどのような最期を迎えたのか。

Woolf が外的世界との関わりを強烈に意識するようになるのは、1930年代の社会的コンテクストによる影響が強いと考えられる。文明の行き詰まり、第二次世界大戦の予兆を感じずにはいられない日常では、Woolf の関心が自然と現実問題へと向けられたのは当然のことだろう。こうした社会状況において Woolf は、他国との関係を思い悩み、英国らしさ(Englishness)を定義しようと努めた。*The Years* や *Between the Acts* は、Woolf が英国の歴史を改めて概観し、英国について思い悩んだ功績が認められるテキストである。外向的な作家活動へと転向する、後期の Woolf が複雑な軌跡を辿るプロセスを、そうしたテキストと共に考察すると、Woolf による英国のヴィジョン、そしてその運命が明らかとなるだろう。